

小松左京氏はSF作家か？

酒井恵三

昨今のコロナ禍で、「復活の日」等小松左京氏の諸作品が改めて注目されている。小松氏の作品群が実際先見性に富み、令和の時代を生きる我々にとっても、示唆的であるのは先ず間違いない事であるが、私は前々から小松文学の文学史上での立ち位置とどうか、評価に対し少なからぬ疑問を抱いていた。小松文学は筒井康隆氏や、星新一氏の文学と並んで「SF御三家」と称されているが、SF（サイエンス・フィクション）と言うよりはパニック小説・冒険小説として読んだ方がしっくりと来る様な気がする。

小松文学を耽読した事のある人ならば、彼が文科系の人である事は（その作風等から）何となく分かるのではないか。実際彼は大阪の出身であり、京大の文学部（イタリア文学科）を卒業した、生粋とも言うべき文系の人だった。小松氏は若い頃から最新科学を始め、様々なジャンルに興味を持ち、猛勉強してそれらを物にし、自らの作品に反映させて行っただけである。彼の作品を読むと、その当時の最新の科学的見地に立った見解が登場するし、或る意味理科系の人間以上に最新科学に精通していたのも当然否定は出来ない。

しかし、真の意味で生粋のSFと言うのは、やはり理系の人でしか書けないのではないだろうか。古今東西の、SF作家として名を残す人々の経歴を見ると、理系の学校を卒業し、科学者や技術者としても仕事を成している人が実に多い事に気付く。私は筒井康隆氏も、小松氏と同じく生粋の文系の人であるが故に、本当の意味でのSF作家とは言えないのではないかと考えている。筒井氏も大阪の出身であり、同志社大の文学部（美学芸術学科）を卒業しているが、彼の作品群もSFと言うよりはユーモア小説、風刺小説として読んだ方がしっくりと来る様な気がする。日本の「SF御三家」の中では星新一氏だけが、（理系の人と言う事で）本当の意味でのSF作家と言えるのではないかと。

勿論、真の意味でのSFかどうかと言う議論は、小松氏や筒井氏の作品群の価値を低くするものではないが、その作家が厳密にはどう言う作家か、ジャンルの人なのかと言うのは（当たり前前の話だが）重要な事である。非常に噛み砕いた話をすれば、その商店が何屋さんなのか、どう言う商品を取り扱っているのかと言う事にも似ていてはないか。そう言う事も知らずに買い物に行く人など、先ず考えられないだろうと思う。

だが、小説の中味はそう簡単には定義出来ないし、ジャンル分けも意外と難しい面があ

小松左京氏は SF 作家か？

る。世の中の事も容易に白黒付けられない事が多々ある。文学史も同じなのだろうと思う。しかし「SF作家」と言う単純な色分けで小松文学や筒井文学を見るよりも、彼等が生粋の文系の人である事、そしてSFとは他ジャンルの文学として読んだ方がはるかに分かり易く、得る物も大きいのではないか。文学史的な色分けは兎も角も、このコロナ禍で小松文学が危機管理と言う見地から読まれる様になったのは至極当然だと感じるのだ。